

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520397

研究課題名（和文）機能範疇の獲得と文法理論への意義

研究課題名（英文）The Acquisition of Functional Categories and the Implication for the Grammatical Theory

研究代表者

村杉恵子 (MURASUGI KEIKO)

南山大学・外国語学部・教授

研究者番号：00239518

研究成果の概要（和文）：

本プロジェクトは、幼児の言語獲得の中間段階にみられる「誤用」が、普遍文法の制限の範囲で起こりうることを、理論的実証的に示すものである。対照言語学的アプローチにより、主に主節不定詞現象、格の誤用、動詞形式の誤用、過剰生成現象に焦点をあて、縦断的観察研究とコーパス分析に基づき、幼児の無意識に普遍文法の道を辿る過程と、その生成文法理論への意義について考察した。

研究成果の概要（英文）：

This project views the language variation through the window of grammar acquisition. Based on the descriptive study of the typical errors children produce, i.e., Root Infinitive (analogues), Case-marking errors, erroneous verbal forms, and the overgeneration in Noun Phrases, we proposed that children know a great deal about the morpho-syntactic properties and the functional structure of their language at a very early age, and even if children produce erroneous sentences, children's intermediate acquisition stages are restricted within the permitted variation of human languages.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：生成文法、文法獲得、原理とパラメター理論、機能範疇、動詞

1. 研究開始当初の背景

言語を分けるパラメターの特徴と第一言語獲得の中間段階との関連は20世紀から21世紀にかけての理論言語学において最も活発に研究されている課題の一つである。過去においては英語における言語獲得の中間段階の分析が研究の主流であったが、最近では、英語以外の言語獲得における中間段階と比較検討し、普遍文法理論の精緻化が図られ

ている。

殊に幼児の産出する母語の「誤り」についての分析は、言語理論へも意義が大きい。例えば、幼児の初期の文は小節であり、幼児の初期の文法には機能範疇が存在しないという仮説がRadford (1990) やGalasso (1998) により提案されている。この仮説によれば、英語を母語とする幼児の発話には、時制やアスペクトに関わる屈折 (Inflection)、限定

詞 (Determiner) の *the* や *a*、補文標識 (Complementizer) の *that* などが見られないことが体系的に示されている。なぜ、言語獲得の初期段階に機能範疇が見られないのかは、現在も解決されない問題として残されたままである。

幼児の「誤り」を理論的に説明する分析として、幼児の「誤り」とは、母語以外の言語の文法 (パラメーター値) を仮定している段階であるとする仮説がある。(Hyams 1986, Roeper 2006) 幼児は言語獲得の中間段階で、他言語において可能な大人の文法の枠内でパラメーター値を仮定するとする提案が、空主語現象や数量詞解釈、*wh*移動の獲得等の実証的研究を基に展開されている。

本プロジェクトは、幼児の産出する「誤用」も生得的な文法の許容範囲において制限されているとする仮説を理論的実証的に検証するものである。本研究プロジェクトの背景となる基礎研究として、Murasugi (1991~2004) は、膠着語言語 (主に日本語) を母語とする幼児の文法獲得途上に見られる機能範疇に関わる誤りを実証的に調査し、複合述語文や複合名詞句の獲得研究から、日本語の文法獲得においても、他言語の文法のパラメーター値を試している段階があることを示してきた。例えば、Murasugi and Hashimoto (2004b) では、他動詞と非対格動詞や、使役動詞と非対格動詞の交替について、縦断的な研究を行ない、他動詞獲得のいくつかの段階とその過程で観察される「誤り」について考察している。日本語を母語とする幼児は、文法獲得の初期の段階において、一貫して、非対格動詞を他動詞としても使用する。(例えば、「開く」を「開ける」の意で使用する。) このことは、日本語獲得の過程で、幼児が、英語の *open* (The door opened/John opened the door) にみられるように、他動詞と非対格動詞が同音であらわされることを仮定していることを示す。Larson (1988)、Hale and Keyser (1993)、Chomsky (1995) の理論に従えば、これは主語に意味役割を与える *v* がゼロ形態素として表れ、結果的に機能範疇がないかのように見える段階を構成することを示唆する。同考察を、更に Murasugi, Hashimoto and Fuji (2007) では、CHILDES のコーパス分析からも裏付けている。本研究は、言語獲得の初期段階において、機能範疇が観察されないという事実に対して、Radford (1990) らによる小節仮説とは異なり、言語獲得の初期に機能範疇自体は存在することを示してきた。

本研究プロジェクトは、幼児の誤用の理由が、機能範疇 (*v*) と語彙範疇 (*V*) の分別化、ならびにその音表示 (語彙化) 獲得に時間がかかることにあるとする仮説を更に経験的に検証し、Hyams (1986) や Roeper (2006) が自然

言語の文法の枠内で捉えようとした言語獲得の中間段階を、新たな実証的事実と理論的分析から見直そうとする試みである。

2. 研究の目的

本研究は、心理言語学研究のひとつである母語獲得のメカニズムを、生成文法理論の枠組みで捉える研究である。本研究の目的は、複数の言語における言語獲得の中間段階の文法体系について精査し、それらの背景にある普遍文法の原理・パラメーターを言語獲得と文法理論の両面から探り、言語獲得理論の精緻化を目指すものである。

3. 研究の方法

○ 主に三つのテーマについて縦断的観察研究と CHILDES ならびにコネチカット・コーパスのデータベース分析による実証研究を通して検証し、生成文法理論を背景として、理論的に考察した。他の言語の獲得研究と理論的研究を幅広く調査することによって対照言語学的なアプローチにより、幼児の言語獲得のプロセスについて理論的実証的考察をおこなった。

○ 研究体制としては、基本的に研究代表者の個人研究であるが、文献調査、データの作成および調査については、適宜研究助手 (大学院生 6 名) に分担させ、共同研究としても発表した。

○ 平成 18-19 年度には、南山大学言語学研究センターならびに同大学院人間文化研究科「魅力ある大学院教育 G P」を拠点として、主に Luigi Rizzi 氏, Adriana Belletti 氏, Diane Lillo-Martin 氏, William Snyder 氏, Thomas Lee 氏, Dylan Tsai 氏, J. Jayaseelan 氏 (アメリカ、シエナ (イタリア)、香港、台湾、ハイデラバード (インド)) などとともに、対照的な研究を進めてきた。本プロジェクトの時期においては、大学院 GP の期間を過ぎてはいるが、南山大学言語学研究センターを拠点として、できる限り今までと同様に共同研究者と意見・資料の交換を行い、中間報告書にコメントをいただき、広く対照言語学の視点を入れて、理論的な言語獲得を行った。

4. 研究成果

○ 主に三つのテーマについて、以下の成果を得、これらを学術論文ならびに国際学会にて発表した。

<日本語の非対格動詞、非能格動詞、他動詞に加えて、膠着語である日本語において多用される複合述語文の獲得過程 (可能文、アスペクト「ている文」、受身文等) の獲得> : 心理言語学研究 (例えば Okubo 1967, Noji

1973-1977, Ito 1990, Shibuya 1994, Arai 2006 等) を精査し、Murasugi, Hashimoto and Fuji (2007)、Fuji, Hashimoto Murasugi (印刷中)、村杉／富士 (2007) 等で記述された事実と、そこで展開されている議論を、新しいデータの発掘や関連文献の調査などにより、さらに拡張させ、項構造の統語的表示にみられる特徴を理論的に分析し提示した。

<機能範疇の関わる複合名詞句 (例えば関係節を含む名詞句) の獲得>

Murasugi (1991)、Murasugi and Hashimoto (2004、2006) の学術論文などで展開されている議論を、新しいデータの発掘や関連文献の調査などによりさらに拡張させる。縦断的観察と CHILDES ならびにコネチカット・コーパスのデータベース分析による実証研究を通して検証し、複合名詞句構造のパラメーターと特徴を理論的に分析し提示した。

<Root Infinitives (主節不定詞) 現象の対照言語学的分析> :

ヨーロッパ言語の文法獲得途上に広く観察される Root Infinitives と称させる現象について精査し、日本語からの分析との相関を複数の言語を調査し解明する。具体的にはロマンス諸語などの屈折の豊かな言語における幼児の機能範疇に関わる誤用と、日本語のような膠着語における機能範疇に関する誤用の相同と相違について一般化をひきだした。

○ 上記の項目について得られた成果は、最終的な研究の遂行を待たず適宜学会発表や論文の形で発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 18 件)

Murasugi, Keiko (2008) "Sentential Modifiers in a Discourse-Pro Language", in Yoshiaki Kaneko, Akira Kikuchi, Daiko Takahashi, Yoshiki Ogawa and Etsuro Shima (eds), *Gengo Kenkyu no Genzai (The State of Art in Linguistic Research)*, Kaitakusha, 115-133.

Murasugi, Keiko and Koji Sugisaki (2008) "The Acquisition in Japanese Syntax", in Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito (eds.), *Handbook of Japanese Linguistics*, Oxford University Press, 250-286.

Fuji, Chisato, Tomoko Hashimoto and Keiko Murasugi (2008) "VP-shell Analysis for the Undergeneration and the

Overgeneration in the Acquisition of Japanese Causatives and Potentials", *Nanzan Linguistics* 4, Center for Linguistics, Nanzan University. 21-41.

Dejima, Mayumi, Tomomi Nakatani and Keiko Murasugi (2008) "The Emergence of Speech Act Phrase: Evidence from a Longitudinal Study of two Japanese-Speaking Infants", *Nanzan Linguistics* 5, Center for Linguistics, Nanzan University. 17-39.

Crain, Stephen, Rosalind Thornton, and Keiko Murasugi (2009) "Capturing the Evasive Passives", *Language Acquisition* 16(2) "Acquisition Archives." 123-133.

Murasugi, Keiko and Chisato Fuji (2009) "Root Infinitives in Japanese and the Late Acquisition of Head-Movement", *Boston University Conference on Language Development* 33 *Proceeding Online Supplement*.

Murasugi, Keiko and Eriko Watanabe (2009) "Case Errors in Child Japanese and the Implications for the Syntactic Theory", *Proceedings of the 3rd Conference on Generative Approaches to Language Acquisition North America (GALANA 3)*. 143-164.

Murasugi, Keiko, Tomomi Nakatani, and Chisato Fuji (2010) "The Roots of Root Infinitive Analogues: The Surrogate Verb Forms Common in Adult ad Child Grammar," *Boston University Conference on Language Development 34 Proceeding Online Supplement*.

Sawada, Naoko, Keiko Murasugi, and Chisato Fuji (2010) "A Theoretical Account for the 'Erroneous' Genitive Subjects in Child Japanese and the Specification of Tense," *Boston University Conference on Language Development 34 Proceeding Online Supplement*.

Murasugi, Keiko, Chisato Fuji and Tomoko Hashimoto (2010) "What's Acquired Later in an Agglutinative Language,"

Nanzan Linguistics 6, Center for Linguistics, Nanzan University.47-78.

Murasugi, Keiko (2010) “The Onset of Complex NPs in Child Production,” *The Proceedings of the 6th Workshop on Altaic in Formal Linguistics (WAFL 6)*, MIT Working Papers in Linguistics, MIT. 27-47.

Murasugi, Keiko and Chisato Fuji (to appear) “Root Infinitives: The Parallel Routes the Japanese- and Korean-speaking Children Step In,” *Proceedings of the Japanese/Korean Linguistics (JK 18) at City University of New York*, Volumn 18.

Murasugi, Keiko, Tomomi Nakatani and Chisato Fuji (to appear) “A Trihedral Approach to the Overgeneration of “no” in the Acquisition of Japanese Noun Phrases,” *Proceedings of the 19th Japanese/Korean Linguistics Conference (JK 19) at University of Hawai‘i at Manoa*, Volumn 19.

Murasugi, Keiko and Tomomi Nakatani (to appear) “Three types of 'Root Infinitives': Theoretical implications from Child Japanese” *Proceedings of 20th Japanese/Korean Linguistics Conference (JK 20) at University of Oxford*, Oxford, Great Britain. October 1. Volumn 20.

Murasugi, Keiko (to appear) “Japanese Syntax: Implications from Language Acquisition”(「対照言語獲得研究からみる日本語」), *The Proceedings of The 10th Annual International Conference of the Japanese Society for Language Science (JSLS 2008)*, Kuroshio, Japan.

中谷友美・村杉恵子 (2009) 「言語獲得における主節不定詞現象：縦断的観察的研究」『アカデミア (文学・語学編)』 Vol. 86. 南山大学. 59-94.

中谷友美・村杉恵子 (2010) 「言語獲得における主節不定詞としての裸動詞：縦断的観察的研究」『アカデミア (文学・語学編)』 Vol. 87. 南山大学. 13-60.

村杉恵子 (印刷中) 「幼児の誤りを観て斯に普遍文法を知る」『千葉修司先生退官記念論集』開拓社.

[学会発表] (計21件)
村杉恵子 「対照言語獲得研究からみる日本語」, The 10th Annual International Conference of the Japanese Society for Language Science (JSLS 2008), 静岡県立大学, 2008年6月12日.(基調講演)

村杉恵子 「記述から言語獲得理論へ(ケーススタディ)」, 第20回三重大学言語学コロキウム, 三重大学, 2008年6月27日.(招聘による発表)

Murasugi, Keiko and Eriko Watanabe (2008) “Case Errors in Child Japanese and the Implications for the Syntactic Theory,” The 3rd Conference on Generative Approaches to Language Acquisition North America (GALANA III), University of Connecticut, September 6.

Dejima, Mayumi, Tomomi Nakatani and Keiko Murasugi (2008) “The Emergence of Speech Act Phrase: Evidence from a Longitudinal Study of two Japanese-Speaking Infants,” Tsinghua-CUHK-Nanzan Joint Workshop on Comparative Syntax and Language Acquisition, Center for Linguistics, Nanzan University, September 18.

Murasugi, Keiko and Chisato Fuji (2008) “Root Infinitives in Japanese and the Late Acquisition of Head Movement,” The 33rd Annual Boston University Conference on Child Language Development (BUCLD 33), Boston University, November 1.

Murasugi, Keiko and Chisato Fuji (2008) “Root Infinitives: The Parallel Route that Japanese-and Korean-speaking Children Step In,” The 18th Japanese-Korean Linguistics Conference, City University of New York, November 13.

Murasugi, Keiko (2008) “Underspecification

of Functional Heads in Language Acquisition,”南山比較統語論国際共同研究プロジェクト:第1回ワークショップ, 南山大学, 11月23日. (文部科学省 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業)

Murasugi, Keiko (2009) “What Japanese-speaking Children’s Errors Tell Us about Syntax,” Workshop on Theoretical Understanding of Language Acquisition, The 7th GLOW in Asia 2009, Hyderabad, India, February 28. (招聘による発表)

Murasugi, Keiko (2009) “The Onset of Complex NPs in Child Production,” The 6th Workshop on Altaic in Formal Linguistics (WAFL 6), Acquisition Panel (Organizer and Chair), Nagoya University, September 5. (招聘による発表)

Murasugi, Keiko, Tomomi Nakatani and Chisato Fuji (2009) “The Roots of Root Infinitive Analogues: The Surrogate Verb Forms Common in Adult and Child Grammar,” 南山比較統語論国際共同研究プロジェクト:第6回ワークショップ, 南山大学, 10月28日. (文部科学省 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業)

Sawada, Naoko, Keiko Murasugi and Chisato Fuji (2009) “A Theoretical Account for the ‘Erroneous’ Genitive Subjects in Child Japanese and the Specification of Tense,” 南山比較統語論国際共同研究プロジェクト:第6回ワークショップ, 南山大学, 10月28日. (文部科学省 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業)

Murasugi, Keiko, Tomomi Nakatani and Chisato Fuji (2009) “The Roots of Root Infinitive Analogues: The Surrogate Verb Forms Common in Adult and Child Grammar,” The 34th Boston University Conference on Child Language Development (BUCLD 34), Boston University, November 7.

Sawada, Naoko, Keiko Murasugi and Chisato Fuji (2009) “A Theoretical Account for the ‘Erroneous’ Genitive Subjects in Child Japanese and the Specification of Tense,” The 34th Boston University Conference on Child Language Development (BUCLD 34), Boston University, November 7.

Murasugi, Keiko, Tomomi Nakatani and Chisato Fuji (2009) “A Trihedral Approach to the Overgeneration of ‘no’ in the Acquisition of Japanese Noun Phrases,” The 19th Japanese/Korean Linguistics Conference (JK 19). University of Hawai‘i at Manoa, November 12.

Sawada, Naoko and Keiko Murasugi and Chisato Fuji (2010) “‘Erroneous’ Genitive Subjects in Child Grammar,” 南山比較統語論国際共同研究プロジェクト:第6回ワークショップ, 南山大学, 10月28日. (文部科学省 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業)

Murasugi, Keiko (2010) “The Linguistic Constellations: Relating Acquisition Phenomena with Parameter Setting,” GLOW-in-Asia 8, Beijing Language and Culture University, Beijing, China. (招聘による発表) August 14.

Sawada, Naoko and Keiko Murasugi (2010) “A Cross-Linguistic Approach to the ‘Erroneous’ Genitive Subjects: Underspecification of Tense in Child Grammar Revisited” The 4th Generative Approaches to Language Acquisition North America (GALANA IV) , University of Toronto, Toronto, Canada. September 1.

Murasugi, Keiko and Tomomi Nakatani (2010) “Three types of ‘Root Infinitives’: Theoretical implications from Child Japanese” 20th Japanese/Korean Linguistics Conference, University of Oxford, Oxford, Great Britain. October 1.

Nakatani, Tomomi and Keiko Murasugi (2010) “The Use of Onomatopoeia as Root

Infinitives in Child Japanese"南山
比較統語論国際共同研究プロジ
ェクト:第10回ワークショップ,
南山大学, 11月13日.(文部
科学省 私立大学戦略的研究基盤
形成支援事業)

村杉恵子 (2010)「言語獲得からみる言語
の多様性」平成22年度大学共同
利用機関法人 人間文化研究機構
国立国語研究所 公募型共同研究
プロジェクト (プロジェクトリ
ーダー:村杉恵子) 主催, 南山大
学言語学研究センター共催, 南
山大学, 2月19日.

中谷友美・村杉恵子 (2010)「主節不定動
詞としてのオノマトペ」平成22
年度大学共同利用機関法人 人間
文化研究機構 国立国語研究所
公募型共同研究プロジェクト
(プロジェクトリーダー:村杉恵
子) 主催, 南山大学言語学研究セ
ンター共催, 南山大学, 2月19
日.

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村杉恵子 (MURASUGI KEIKO)

南山大学外国語学部教授

研究者番号: 00239518

(2) 研究分担者

なし

研究者番号:

(3) 連携研究者

斎藤 衛 (SAITO MAMORU)

南山大学人文学部教授

研究者番号: 70186964

(4) 研究協力者

Andriana Belletti (University of Siena)

Thomas Hun-Tak Lee (Chinese University of
Hong Kong)

T.-H. Jonah Lin (National Tsing-Hua
University)

Diane Lillo-Martin (University of
Connecticut)

Luigi Rizzi (University of Siena)

Ian Roberts (Cambridge University)

William Snyder (University of Connecticut)

W.-T. Dylan Tsai (National Tsing-Hua
University)